

盆綱攷

—成田市赤荻の事例から—

櫻井龍彦*

A Study of “Bon Rope”:

From the Perspective of Taking Akaogi, Narita City

Tatsuhiko SAKURAI

Abstract

Events using rope made mainly of straw can be found all over Japan. The tug of war is the most representative form and is practiced over a large area from the Tohoku region to Okinawa. The event is held at various times of the year, such as the Lunar New Year, Boys' Festival (端午節), Bon (盆), Hassaku (八朔: August 1) and August full moon night.

The object of the current study, “Bon rope” (盆綱), is a folk event performed literally during the period of Bon. The distribution of this tradition is considerably limited; it is maldistributed in two areas—in Northern Kyushu concentrated in Fukuoka, Saga, and Nagasaki Prefecture, and in Kanto from the Southern-Central region of Ibaraki Prefecture through the North of Chiba Prefecture.

“Bon rope” is made of materials such as straw, and can be likened to a dragon or snake. On August 13 and 15, children walk around each house with a rope in their hands. “Bon rope” is believed to transport the ancestral spirits to houses.

This paper deciphers the complicated element inherent in this event from the example of Akaogi, Narita City. This work offers an opportunity to reconsider universal issues such as Japanese beliefs surrounding the souls of ancestors, memorial services for the dead, communal praying for protection from disasters, belief in Ryujin (benevolent dragon) and Suijin (aquatic) gods, tug of war, agricultural rituals and so.

1. はじめに

わが国にはワラやカズラ、カヤなどで編んだ綱をつかった行事が各地に存在する。綱引きはその代表で、東北から沖縄まで広範囲に分布している。行われる時期も小正月、端午節、盆、八朔、八月十五夜などいろいろである。

ここに考察しようとする「盆綱」は、文字通り盆の期間に行う民俗行事である。分布はかなりかたよっていて、福岡県、佐賀県、長崎県を中心とする北九州と茨城県中南部から千葉県北部にかけての関東との二地域に偏在している。

北九州の盆綱はほとんどが綱引きをとまなうので、「盆綱引き」と称される。関東の事例はむしろ綱引きをとまなうことが少ない。こ

* 名古屋大学大学院国際開発研究科教授

うした点をふくめた二地域の盆綱行事の相違については本文中でもふれる。

九州の綱引きについては、鹿児島、熊本、宮崎など南九州に「十五夜綱引き」が濃厚に分布していて、小野重朗の専著がある（小野 1972）。しかし北九州の盆綱引きについての先行研究や報告書はごく限られたものでしかない（山口 1970, 1974, 上野 2001, 二丈町教育委員会 2006）。

関東の盆綱は千葉よりも茨城の方が、分布域が広く事例も多い。一説には茨城ではかつて 125 か所で（弓削田 2005 : 66）、千葉では総数はわからないが成田市だけで 30 数か所でおこなわれていたという（千葉県史料研究財団 1999 : 275）。

茨城の盆綱については、茨城民俗学会の会誌『茨城の民俗』に掲載された藤田稔、嶋田尚の論考がある（藤田 1964, 嶋田 1988-91）。しかしいずれも古い内容で、その後廃絶した地区が多いので、様変わりした現状を把握するには適切ではない。千葉県については管見の及ぶ限り、弓削田綾乃が山口の盆綱について報告したものしかなく（弓削田 2005）、教育委員会が作成した調査報告書もない。

このように盆綱については、市町村史や綱引き研究の中で言及されることはあっても、専論としての先行研究は決して十分ではない。特に千葉県の盆綱研究は弓削田の報告以外にはないのではないか。

本稿も成田市の赤荻という地区に限定したもので、千葉県各地の盆綱を調査した上での研究ではないが、必要な範囲で県内外の過去と現在の状況にふれながら盆綱の考察をすすめたい。なお以下、地名をあげる場合に、旧名称をそのままあげるときと合併後の新名称であげるときが混在していることを断ってお

く、とくに引用にあたってはもとの文献を尊重して旧名称を使う。

2. 成田市赤荻の盆綱

「盆綱」とはなにか。綱の名称でもあるし、行事の名称でもある。北九州の「盆綱」は「盆綱引き」と命名されるように、盆におこなう綱引きの性格が強いなどいくつかの点で関東のものとは違いがある。そのため同じ定義はできないが、共通する部分に着目して定義を与えるのなら、「藁などの材料を編んで作った綱を使った盆の行事」という程度である。

ここでは茨城、千葉にみられる盆綱の定義を「藁などを材料にして作り、龍蛇に見立てられた綱を子どもたちが手で持ったり担いだりしながら、迎え盆の 8 月 13 日と送り盆の 15 日に各家をまわって歩き、仏様を家々に送迎する行事」としておきたい。

この関東にみられる盆綱の共通要素は、多少の相違はあるものの、以下のようにまとめられる。

1. 盆の期間（8 月 13～15 日の三日間）におこなう。
2. 綱は藁で作り、龍蛇に見立てられる。
3. 綱は仏様の乗りものである。
4. 13 日に仏様を迎え（綱にのせ）、15 日に送る。迎えるだけで送らないところもある。
5. 子どもが中心となる行事である。
6. 綱を手を持ったり、引きずったりしながら練り歩く。
7. 川（広義には水）と関連がある。
8. 稲作と関連がある。

これに次の要素が加わることがある。

9. 綱引きがともなう。
10. 相撲がともなう。

まず赤荻地区の概況を述べる。

赤荻は JR 成田駅から北東へ 4 キロほどのところにあり、さらに北へ 6 キロいくと利根川である。2003 年に集落の真ん中を県道 63 号線が開通し、交通量が増えた。

もともとは成田市郊外の農村地域だが、担い手が高齢になって後継者がいないので農業をやめるところが多くなってきた。丘陵地が多いため田は谷あいの土地に作り、それを地元の人々は谷津田と呼んでいる。こういった丘陵地も開発され、集落の南側が首都圏の霊園として、約 44 万平方メートルの広大な「成田メモリアルパーク」になっている。

民家は空港騒音の保証金で建て直した家が多くなかなか立派である。太平洋岸沿いに見られる昔ながらの田の字型間取りの家も残っている¹⁾。三世代同居もあり、盆綱のような地域の伝統行事にはみな協力的である。

赤荻の住民は大木、寺内、山倉が三大姓である。それ以外の姓は他所から来た人とみてよい。平成 23 年 6 月末で、世帯数が 76、人口が 232 人（男 110、女 122）である²⁾。平成 18 年 6 月のデータでは世帯数が 71、人口が 240（男 118、女 122）であったので³⁾、この 5 年間の人口をみても、ほとんど変動がないのは、市街地近郊にもかかわらずあたらしい住民が入居してこないからである。その理由は空港にある。赤荻のある中郷地区は、成田国際空港の離発着コースの直下であり、そのため騒音補償区域に指定されていて、転出は可能だが、転入は禁止されている。

開港以来、住居を移転する世帯が相次い

で、いま残っている住民は移転しないことを決めた家族なので、世帯数はほぼ落ち着いている。しかし児童数の減少が続いたため、盆綱の主役となる子どもが通う中郷小学校は平成 23 年 4 月から美郷台小学校と統合し、閉校となった。明治 20 年創設の歴史ある小学校なので、年配者には特別な気持ちがある。今後、減ることはあっても増えることがない人口で、盆綱行事を維持していくことの困難さに住民も直面している。

盆綱は 8 月 13 日から三日間おこなわれる。赤荻では 13 日の迎え盆と 15 日の送り盆のときに引きまわす。二日目の 14 日はなにも行事がない。馬場、土屋、奈土のように 3 日間毎日おこなうようなところもある（高橋 1978 : 78, 『広報なりた』2006 年 9 月 15 日号）。

筆者が調査をおこなったのは、2010 年 8 月 15 日の送り盆である。

以下の報告は、この年の世話役となった大木昭二さんはじめ、行事に参加した住民たちからの聞き取りと筆者の観察にもとづき、他の地区との比較については、問い合わせや文献資料、Web 上の情報にもとづく。

赤荻の盆綱の由来や歴史についてはわからない。集落に関わる文書は区長が順送りに保管しているというので、その中になにか記録があるかもしれない。昭和 45 年から 2、3 年中断したことがあったが、その後復活してから一度もやめたことはない。

盆綱にはいわゆる保存会のような伝承組織はない。小学生が参加するので、その親たちが運営にあたる。大木さんは自分の子（女の子）が小学 6 年生で最年長として「親方」になるので、たまたま世話役に選ばれただけだという。

本来は男の子だけがする行事だった。それも長男だった。柏市大室では30歳までの長男だけが参加できたという⁴⁾。しかし少子化の影響で赤荻では、平成10年から女の子も参加するようになった。老人たちから反発もあったようだが、地域の伝統を存続する意見に押し切られたという。

赤荻では6年生を「親方」、5年生以下を「子方」あるいは「子親方」と呼んでいる。他地域では土屋のように「一番親方」「二番親方」(『広報なりた』2004年8月15日号)と呼んだり、「頭領」「副頭領」、「部長」「副部長」というところもある。

この年に参加した人数は、途中で加わったり帰宅する子もいるので一定しないが、お寺(善福寺)を出発するときは15名であった。うち3名は男子。ほとんどが女の子という事実から、女子の参加なくして伝承できないことがわかる。

中郷小学校の子は体操服で統一している。なかに私服の子がいるが、それは嫁にでたが実家が赤荻にある女性の子供である。その子自身は赤荻の子ではないが、お盆に帰省した母親が赤荻出身ということで参加できる。これも変化の一つであろう。

みんなハチマキをしている。土屋でもハチマキをする(『広報なりた』2004年8月15日号)ので1つの習俗のようだ。盆綱とハチマキとの関係で注目すべきは、九州の筑後市久富の盆綱引きで子供たちが頭につける角ハチマキや福岡市西区西浦の盆綱引きで「ショウキダイジン(鍾馗大臣)」が被る角ハチマキであろう。全身を煤で真っ黒に塗り、腰蓑をつけ、角ハチマキをつけて黒鬼に扮した久富の子どもは、地獄の釜の番人を象徴しているという。千葉でみられるハチマキにどのような

意味があるかは不明である。

2010年の盆綱は7月31日の綱作りからはじまった。それを8月13日まで善福寺の軒下に置いておく。例年、1週間前に作るのだが、この年は他の行事との関係で2週間前の31日に作ったという。作るのは親たちである。以前は寺の前にある弁天池脇のイチョウの木に架けて縄を縋っていたが、いまは消防団の器具庫横にあるホースを干すポールにひっかけて作っている。

材料は稲藁である。7月30日に1軒ずつまわって調達するが、農業をやめて藁が出せない家では500円ぐらいのお金をだす。縄は太めになっている。鎌で稲をかっていたころは、藁が長かったので、撚りやすく細く長く作れた。しかし今はコンバインで刈るので、藁が短くなって、撚りにくい。そのため全体が短く太くなってしまふ。綱の長さは参加する子供の数にあわせる。この年は長さ6m弱で直径は25cmほどであった。

関東の盆綱は龍蛇に見立てられている。赤荻でも市史では、そう伝えているが(成田市史編纂委員会1982:360)、現地の人に尋ねても、そういうことは考えたことがない様子であった。確かに顔が龍蛇のように作られているわけではない。しかし土屋のように大きな目、髪の毛、二本の角、赤い舌を付けた龍面にするとところもある(『広報なりた』2004年8月15日号)。

綱の運び方は担ぐ(久米、吉倉)、引きずる(成毛)、下げるなどの方法があるが(成田市史編纂委員会1982:359)、赤荻や隣村の新妻では下げて運ぶ。そのため手で持てるように小さな綱の輪が必要で、本体に白い布で巻いた子綱がついている。もともとはそういうものがあったわけではない。藁がチクチクして

痛いので巻くようになったという。この輪型の手綱の部分を「ちあみ」とか「ちー」と言っている。参加する子供が自分の分は自分で作って持ってきたものだが、いまは大人がついでに作ってくれる。



写真1 盆綱

送り盆の15日、出発は午後3時半ということになっていたが、まだ外は暑い。ぼつぼつ集まってきて、全員が集合できたのは4時ごろであった。これから約5時間かけて赤荻集落内の55軒を回る。夏の暑さを避け、お盆という行事でもあるので、このように夕方から夜にかけておこなう。迎え盆の13日も同様である。

善福寺の前で時計と反対まわりに3回まわってから出発する(16時3分)。綱は仏様を乗せるものなので、迎え盆では墓を出発点、送り盆では墓を終着点とするのが通常である。現在善福寺に墓はないが、以前は寺の下に墓があった。赤荻でも墓が基点であったが、今は寺を出発し、最後は市立赤荻保育園でおわる。出発前に墓(寺)でまわる回数は3回とは限らず、奈土のように7回のところもある⁵⁾。

善福寺は天台宗である。盆綱行事のある村は天台宗に属するところが多いのが特徴である。

子供たちは「ちあみ」を持ちながら綱を引

いて一軒一軒まわる。地面を引きずるのではなく、浮かして運ぶので幼い子供には腕が疲れることだろう。3人の子が「子供連」と書いた提灯を持っている。歩きながら親方のあとについて、みんなで「ヤーッサイ、ヤーッサイ」と元気なかけ声を発する。かけ声は地区によっていろいろである。「ロッコンセイジョー(六根清浄)」が多いようであるが(たとえば隣の新妻や土屋など)、奈土のように各家へ向かうときは「ワッショイ、ボンボン」、新盆の家へ向かうときは「シンボン、トウロウ」というところもある(『広報なりた』2006年9月15日号)。

盆綱は地縁的な行事なので、練り歩く地域は赤荻区内だけである。『成田市史』に、時代の明示がないのでいつ頃の状況かはわからないが、赤荻の盆綱巡回路線図が載っている(成田市史編纂委員会1982:123)。市史の出版年が1982年であるので、それ以前の状況であることは間違いない。昭和53年に耕地整理がおこなわれ、旧道がなくなって新しい道路ができたため、現在の巡回路に多少の変化はあるが、各家をまわる順序はまったく変わっていない。村落の域内の家々55軒をくまなくまわることから地域の盆行事であることがよくわかる。このことは他地区でも同じである。

本来は子どもだけでまわる行事だが、いまは新しい県道63号線の交通量が多く危険なので、安全のため親たちがついてまわっている。また少し距離のある家への移動には、縄と子供を軽トラに乗せている。2、3度そんな光景が見られたが、以前ならありえなかったことだろう。

田の字型の農家のなごりで、どの家も庭先がひろい。子どもたちは庭に入り、反時計方

向に1回まわる。新盆の家では3回、二年盆の家では2回まわる。13日は綱にご先祖を乗せて各家でおろし、15日は家でお盆のあいだ祀られたご先祖をのせて帰らせる。そのための巡行である。各家では子どもたちが13日には「降りろ、降りろ」といい、15日には「乗れ、乗れ」と声を出すようなところもある(千葉県史料研究財団 1999: 275)。赤荻ではそのようなことは言わない。

茨城県でも同様のかけ声を発する。鉾田市高田では、集落の墓地に行き先祖を乗せるため「ほーどけさま、のっらしょう」と唱え、その後、先祖の霊を乗せた盆綱を引きながら集落内を一軒ごと練り歩き、各家々に着くと「ほーどけさま、おじらしょう」と唱え、その先祖の霊をおろす⁶⁾。

玄関先で家の人からご祝儀をもらう。ご祝儀を「おぼしめし」と言っている。お金は親方の持つ提灯の中に入れてもらう。金額は500円から1000円ぐらいである。これは行事の最後に、参加した子どもたちが均等に分け合う。かつてはこのお金をもらって歩くことが子どもの生活規範を乱すといつて問題にされ、盆綱行事を中止したところもあったようだ(高橋 197: 115)



写真2 庭で左回りにまわる

新仏は霊が不安定で荒々しい。そこで盆綱は新盆の家では特に丁重に回る。新盆の家の庭先で3回まわるのもそのためである。この年は2軒が新盆を迎えた。盆綱行事は、地域によっては新盆の家だけまわるところもあるようだ⁷⁾。

新盆の家の方も他の家より丁重に盆綱を迎える。「おぼしめし」は多めに出すし、子どもたちがひと休みする場所でもある。休憩の時にスイカ、ジュース、お菓子などを子どもにふるまう。また夕飯も提供することになっている。今回は2軒の家が相談し、13日の迎え盆に提供する家と15日の送り盆に提供する家を決めて分担した。

新盆の家は「高燈籠」を立てる。青竹を二つに切り、十字形にしたもので、これに燈籠を吊る。新盆の家が屋敷の前に立て、新仏が迷わずに家に帰れるよう道標とした。この年の2軒の新盆の家ではいずれも高燈籠を立てていない。うち1軒では、毎日、出したりしまったりするのが面倒なので立てなかったと、そのわけを話していた。

この燈籠の下に竹と木で枠をつくり、まわりに半紙を貼って囲い込み、なかにロウソクを立てたものを置く。これを「四十九燈籠」とよんでいる。8月7日に棚吊りをするとき作成する。新妻では「八燈籠」と呼び、毎晩灯した(成田市史編纂委員会 1982: 355)。

新盆の家では、今回高燈籠はなかったが、四十九燈籠だけは庭の中にこしらえていた。竹で49本の棒をたて、紙で囲った長方形(20 cm×80 cm)の燈籠の中に5本のロウソクを立てたもので、ご先祖を四十八燈で迎え、残りの1燈は無縁仏の供養のためにとす。

この燈籠を破壊するのが、赤荻の盆綱行事のいわばクライマックスである。

盆綱は他の家をまわっていても、6時になると、いったん新盆の家にもどってきて、夕飯をごちそうになる。そのあと子供たちが竹の棒で「四十九燈籠」を壊すのである（18時40分）。ロウソクの火を打ち消し、燈籠そのものを破壊してしまうのは、仏送りが一般に提灯や線香の火を消して仏がこの世と縁を切って旅立つようにすることと関係があるだろう。この燈籠の打ち壊しが、他地区でも同様にあるのかどうかは文献その他の資料でも確認できない。



写真3 四十九燈籠の破壊

集落の引きまわしはそのあとも続くが、最後はお地蔵さまのところへ行き、みんなでロウソクを1本ずつ立てて祈る（19時50分）。お地蔵さまはトタン張りの粗末なお堂の中に安置されている。お堂は赤荻からみれば、成田メモリアルパークと接する南側の田んぼのあぜ道にあるが、以前は耕地整理前の旧道にあった。この地蔵参りは13日の迎え盆のときもおこなう。

20時をまわると子どもたちの疲労もピークだ。しかしおわりが近づいてくると最後は花火ができるという楽しみから逆に「ヤーッサイ」のかけ声も一段と大きくなる。20時20分に終着点の保育園に到着。このあと花火をし、「おぼしめし」を分け合って解散である。



写真4 お地蔵さま

役目をおえた綱は、いまは寺に放置するが、大木昭二さんの話では、かつては弁天池に持って行って、火をつけて捨てたことが多く、池の脇にあるイチョウの木に巻きつけたこともあったようである。盆綱の最後の処理法にはいろいろある。寺や墓地に奉納する、川に流す⁸⁾という2例が一番多い。池に沈める、燃やす、切り刻む、欲しい人がちぎって持って行く、寺の境内の木につるしておく⁹⁾などの方法もある。川や池など水にゆかりのあるところに流す場合が多いのは、綱が龍蛇に見立てられることや除災や汚穢駆除とも関係があるだろう。水神としての龍蛇や除災については後述する。

寺の前の弁天池は今は埋められている。池には濁が流れ込んでいたが、ボウフラがわいたりして不衛生なので埋めた。かつて綱を燃したイチョウの木の前に、平成21年9月、檀家一同が碑を建てている。碑文には次のようにある。

稲荷山・善福寺・弁天池跡

敬白

此の地に弁天池あり
清水湧き出で人を潤す
時を経て環境も変り

詮無く世の求めに応じて池を埋む
 此に石碑を建立し
 以て長年の感謝を捧げ後代に伝ふ
 願はくは弁天池が主
 我等が法施を愛敬納受し給ひ
 永く慈悲の護念を垂れ給へ
 維時 平成二十一年九月吉日
 稻荷山・善福寺・住職 慈泉
 檀徒総代一同

ここにいう「弁天池が主」がなにを指すのか。『成田市史』には、「赤荻は綱は龍であるからというので、使ったあとは寺の前の池に投げ込まれる」（成田市史編纂委員会 1982：360）とある。盆綱の綱が龍蛇として扱われることは茨城、千葉ではほぼ共通しているので、池の主も龍蛇だと考えられる。しかし地元の人に聞いても、とくにそういう認識はなかった。

盆綱の引きまわしがおわると、綱引きや相撲をおこなうところもあるが、赤荻ではいずれもない。

以上が赤荻の盆綱行事の概要である。すでに若干の考察もまじえながら論じたが、以下に問題点を取りあげ、重点的に考察したい。

3. 考察

3.1 分布地域から考えられること

(1) 利根川流域の民俗

前述したように成田市はかつて 30 数カ所で盆綱をおこなっていたという（千葉県史料研究財団 1999：275）。『成田市史』の分布図を見てもそれぐらいだとわかる（成田市史編纂委員会 1982：359）。しかし現状は廃絶したところが多く、また復活したところもあったりして、現存地域を正確に把握するのは困難

である。

成田市教育委員会の生涯学習課文化振興室の大木さんによれば、奈土、土屋、新妻、赤荻、飯岡、山口で行われていたが、いま新妻、土屋、山口ではやっていないだろうという。それとは逆に、『広報なりた』2004 年 8 月 15 日号には「現在、土屋のほか新妻・赤荻・山口地区などで行われるだけとなった」とあり、赤荻の人のなかには、新妻や飯岡、東和泉でもやっているのではないか、という。だれも正確な情報をつかんでいないということであろう。

『広報なりた』2006 年 9 月 15 日号や Web 上の情報では、以前のやり方そのままではないが、土屋と奈土でもおこなわれていることがわかる。かつては「成田の山之作、野毛平、十余三、山口、東和田をはじめ富里の日吉倉などで行われていたが、現在ではほとんどといってよいほどおこなわれていない。」（高橋 1978：78）という記事もあわせて考えると、これらの地名から成田市でも東寄りの地域に多く伝承地があるようだ。赤荻もそのうちの 1 つの集落である。

千葉県全体で見た場合、盆綱の存在はかなり偏っている。成田、富里、佐倉などの旧印旛郡と下総、大栄、多古、佐原といった旧香取郡に伝承されている。つまり下総の中部から東部に集中している。なかでも成田市の分布が濃厚であるのは上述のとおりである（千葉県史料研究財団 1999：275、534）。

縣市町村別の民俗調査の報告書を見ている限りでは、行政範囲をこえて共通する民俗の分布的広がりについては把握しがたい。本稿がとりあげた千葉県の盆綱も千葉県のなかだけで考えては自ずと限界がある。盆綱は古い地域名でいえば、安房や上総ではなく、

下総に特徴的にみられるもので、さらにそれは利根川を越えて常陸に広がっている。つまり千葉県北部と茨城県中南部とくに霞ヶ浦周辺（稲敷、玉造、銚田など）に共通してみられる行事で、下総と常陸の利根川流域の民俗として捉えるべきものである。

下総と常陸の利根川流域が一つの民俗文化圏を形成していると考えられるのは、ここには盆綱だけではなく、七夕のマコモ馬や犬供養、大師廻り、靈感講観音まわり、背負い観音なども共通する民俗として観察できるからだ（成田市史編纂委員会 1982:19。大師廻りの分布図は同書 p434、靈感講観音まわりは p435 以下を参照）。それは言葉にも現れていて、この民俗圏で使用される方言を俗に「チバラギ弁」と称するように、共通するものがあった。それは利根川の河川交通を媒介とした文化交流・伝播の影響によって形成されたという考えもある（成田市史編纂委員会 1982:648）。

かつては 125 か所でおこなわれていたといわれるように、数からみると茨城が圧倒的に多い。となると盆綱は茨城の霞ヶ浦周辺を中心に分布する民俗であり、その南限が利根川を南に越えた下総である、と考えるのがよいだろう。千葉の分布は盆綱の南限に位置することになる。

（2）マコモ馬との関係

盆綱の分布がマコモ馬のそれと重なることを指摘したので、すこし詳しく述べたい。

七夕に祖霊の乗りものとして、ワラやチガヤ、マコモなどで馬や牛をつくるのは東日本に多く、ナスやキュウリなどでつくるのは西日本に多い。千葉ではマコモやワラで牛馬や雌雄の馬を作り、子どもが早朝それを引きま

わして遊んだりする風習がある。この「七夕馬」は牛馬各一体で一組とすることが多いが、呼び方は一般に「マコモ馬」と称される。

いま七夕は新暦で、盆は多くが月遅れで行っているので、両者の時期が離れてしまっているが、本来七夕はお盆の前にあり盆と深いつながりのある行事であった。「七日程」といういい方もあるように、盆行事は七夕からはじまるといわれるぐらいである。マコモ馬と盆綱との密接な関係を示すのが、柏市大室の「盆綱引き」である。お盆前の 8 月 7 日に吉祥院の境内において盆綱づくりをする。完成した綱は境内の参道に置かれるが、綱の前にはマコモで作った七夕飾りの馬も置くという¹⁰⁾。

マコモ馬をお盆に帰ってくる先祖霊の乗りものと考えるところが、成田市、佐倉市、印旛村、四街道市、舟橋市、鎌ヶ谷市、八千代市など下総西部を中心に広がっている（千葉県史料研究財団 1999:265）。とくに七日に馬を川に流して仏様を迎えに行かせると考えるところが多く、仏迎えに馬と川が関連している。一方、牛の方は仏様を送り返すときの乗りものとされる。

マコモ馬は千葉県では全域でみられるが、全国的な分布からいえば、かなり偏在していて、千葉県北部と茨城県南部周辺つまり旧下総や利根川の流域に濃密である。これは盆綱の分布と重なる。しかもマコモ馬が仏の乗りものであると考える地域は、千葉県でも北の下総に限られ、これもまた盆綱の分布地域とほぼ重なることは注目に値する。但し材料をマコモに限定しなければ、安房地方にはチガヤの馬を仏の乗りものとする例があるが、七夕馬で先祖を迎える事例は下総に集中している（千葉県立房総のむら 2000:30）。

マコモ馬と盆綱を比較し、その共通点と相違点をみてみよう。

共通しているのは、①仏様の乗りものと考えられていること、②川に流すことである。しかし似ているようにみえるこの2点も仔細にみれば、次のような相違がある。

まず①仏様の乗りものとして共通しているが、マコモ馬は馬が仏迎えに、牛が仏送りに使われる一方、盆綱はほとんどが仏迎えに使われるだけで、仏送りに使われる事例は圧倒的に少ないことである。たとえば嶋田尚がまとめた茨城、千葉両県の盆綱の分布地域をみると、仏迎えの例は40箇所（うち千葉は2箇所）あるが、送迎ともにあるところは2箇所（うち千葉が1箇所）、仏送りだけは1箇所（茨城）となっている（嶋田1988:28以下の表）。送迎の盆綱として嶋田があげる千葉の1例は富里市日吉倉だが、成田では赤荻をはじめ堀之内、新妻（成田市史編纂委員会1982:359, 360）、山口（弓削田2005）などが送迎ともに使っているのも、もう少し事例は増えることになる。

次に②川に流すこともマコモ馬、盆綱ともに見られるが、その目的が違う。マコモ馬は仏様を迎えに行くため川に流される。しかし盆綱は墓などで仏迎えをすませ、各家々をまわって仏様を降ろしたあと、その日(13日)に川に流して処分する。綱の最後の処分方法として、焼く、捨て去るなどの方法もあるが、川に流す事例が多かった。つまり盆綱はマコモ馬のように、仏様を迎えるために流されるのではなく、迎え終わり家々に降ろしたあと、その役割を終えたがために川に流すのである。

盆綱をいまマコモ馬を指標にして考察しようとする、次のような疑問点が浮かび上がる。

①マコモ馬と盆綱が、盆と深いつながりがあるとするれば、問題は仏様の乗りものがなぜマコモ馬と綱の2種類あるのかという点である。

盆綱の分布とマコモ馬の分布地域が一致しなければ、このような疑問は生じない。しかし一致するのであれば、両者の関係をどう説明したらよいのか。

ここで注意しなければならないのは、マコモ馬はその事例がすべて仏迎えのために作られるというわけではない点である。マコモ馬は千葉県全域にみられるとはいえ、その目的が仏迎えではなく、別の目的として伝承している地域がある。たとえば下総東部から上総東部にかけては、マコモ馬の背中に俵（これもマコモで作る）をつけ川に流す。多古町では「七日早朝に子供たちが川へマコモの牛馬を引いていき、俵を川に流してからヒエや草を刈って牛馬の背中につけ、帰ってきた」（成田市史編纂委員会1982:266）。これは農耕の牛馬をねぎらう意味があるという。

『千葉の歴史』にあるマコモ馬分布図と盆綱分布図（千葉県史料研究財団1999:267, 277）を対照してみると、マコモ馬のうち、仏の乗りものとして伝承している地域は下総の中部から西部に集中している。上記の「草刈り」の目的で伝承している地域は、下総、上総ともに東部の沿海部に近い地域である。一方盆綱は下総の中部から東部に多い。

下総町、成田市、佐倉市、多古町のように、中部からやや東寄りの地域では、マコモ馬と盆綱両者がともに伝承されているものの、おおざっぱに括れば、仏様の乗りものとしてのマコモ馬は下総中西部に、同じく仏様の乗りものである盆綱は下総中東部に分布している。下総を東西に分けて、東が盆綱分布域、西が

マコモ馬分布域という枠で考えてみれば、一応はすみ分けているように見える。しかしそれでも重なって分布するところがあるので、依然として、仏様の乗りものになぜ2種類あるのかという疑問は解けない。

②マコモ馬は仏様の送迎に使われるので、仏様はあの世とこの世との往来に不便はない。しかし盆綱は迎えに使われるのがほとんどで、あの世に送り返す乗りものとして一般的ではない。では仏様はどのようにしてあの世に帰還するのか。

茨城県東茨城郡茨城町小堤では13日に盆綱で仏様を迎え終わると、盆綱は捨て去られるが、15日に家族全員で墓参りをし、16日に花などをもって仏様を墓所に送る（藤田1964：60）。とすれば盆綱で仏様を迎えるのとは別に、15、16日に家族の墓参りによって送迎を行っていることになる。

理屈から考えると、仏様は13日に綱に乗ってすでに家族のもとに来ていて、墓には不在のはずなのに、なぜ15日に家族が墓参りをするのであろうか。茨城県稲敷郡牛久町田宮のように、仏様を盆綱に乗せる13日に、同時に各家庭で墓参りをするところもある（藤田1964：62）。

お盆の普通の形態は、墓参りによる仏の迎え送りであるが、そこに盆綱行事が重なって、このような形態になったのかもしれない。しかし場所によっては、盆綱をつかって迎え送りをともに行うところもあれば、茨城県東茨城郡小川町上吉影のように、仏様は綱ののってやって来るので、13、14、15日は墓参りにはいかず、16日に供え物を持って墓に行き、仏様を送るというところもある。この例では、迎えは綱、送りは墓参りと明確に区別されているので、矛盾はない。

このように地域差もあって一定しないので、仏様の送迎に関する盆綱と墓参との関係を説明するのはむずかしい。一つの解釈として家ごとに個別におこなう「私」・「血縁」のお盆と地域共同体の集団的な「公」・「地縁」のお盆の二つの行事が共催されるため、送迎の形態にそれが反映していると考えられるかもしれない。つまり各家族単位での個人行事のお盆は一般的な墓参を基本とし、地域が共同でいとなむ集団行事としては盆綱を使う。それが重層して、送迎の形態にいくつかの種類が現れると推測するのである。

この説明の根拠として、盆綱が龍蛇の形にみ立てられる点が指摘できる。龍蛇は水神として水をつかさどるため稲作農耕と密接に関係している。農耕儀礼は地域共同体が実施する祭祀であり、個人の祭りではない。だから盆綱が龍蛇とされ、それを使った盆行事は地域全体で主催する行事ということになる。

また盆行事に綱引きが入っていることから説明できるだろう。綱引きはもともとは仏様の送迎とは関係がない。競技としてのこの民俗は、勝った方が豊作、豊漁になるという豊穰祈願に関わるものである。それは個人の行事ではなく、地域全体の祈願であるため農耕と深い関係がある水神の龍蛇を模した綱による綱引きがおこなわれる。その農耕神・水神としての龍蛇の綱が仏様の乗りものとしてお盆の送迎に利用されたのであろう。

家ごとに祭祀される個別の祖霊は、龍蛇の姿をとることで、いわば龍神・水神と化し、地域の豊穰を約束する田の作神としても来臨するのである。祖先祭祀が龍神信仰と結合したものがこの盆綱行事の特徴であると考えられると、祖霊の姿に水神の龍蛇を重ねた祖霊観を想定できる。盆綱が利根川流域に分布するこ

とも、水との関連から理解できるであろう。このような祖霊観を日本全体に普遍的なものとするわけにはいかないだろうが、河川の流域にある稲作農耕地帯の人々が思い描いた祖先の事例として考察することはできる。なお綱が盆を契機に龍蛇にもなり祖霊の乗りものにもなる汎用的な機能については、さらに後でも述べることにする。

以上、千葉の盆綱とマコモ馬との関係を述べたが、同様な行事の重なりは「綱吊り」「綱張り」「辻切り」などともいうと「オタチ」行事からも指摘できる。

「綱吊り」は1月あるいは2月に藁で大きな蛇をつくり、村の境界に張る行事である。目的は村の外から邪悪なものや疫病が侵入してこないよう防御するためである。五穀豊穣も祈るという。類似した行事は奈良の「綱掛祭り」など他地域にも多い。

藁で大蛇をつくるのは、盆綱と同じである。盆綱も龍や大蛇にみたてた綱である。そしてこの藁蛇の分布地域は千葉県でも北部の下総しかなく、佐倉市、多古市、八日市場市など盆綱のある地域とやはり重なるのである(千葉県南部では注連縄を使う)(千葉県史料研究財団 1999: 252 に藁綱の分布図)。匝瑳市片子妙印寺の盆綱はまさにこの綱吊りと同じ主旨である。14日に盆綱を作り、境内の2本の大木につるしておく。しかも綱は祖霊との関係だけではなく、五穀豊穣、無病息災も願うものであった。(『広報そうさ』2008年7月号 匝瑳探訪 (28))。

「オタチ」は「御太刀」と書くように、木製の刀(といっても柱のようなもの)を使った6月または7月の行事である。地区の子どもがこの木製の「オタチ」を担いで家々をまわり、五穀豊穣や家内安全を祈願する。成田市

山口、北羽鳥、竜台、奈土、大室あるいは佐倉市などに分布している。担いでまわるものこそ、木と藁の違いがあるが、行為そのものは盆綱とおなじである。

おもしろいことに千葉県との県境にある茨城県北相馬郡利根町布川のオタチは藁で作った龍蛇がくくりつけてある。まさに盆綱と一体化している。しかしこの形が布川のオタチの本来の姿なのか、それとも近年の変化なのかはわからない¹¹⁾。

いずれにせよ、綱吊り(1, 2月)、オタチ(6, 7月)、マコモ馬(7月)、盆綱(8月)などは、時期は違っていても、同じ地域で形をかえながらも1年の厄災除け、無病息災、五穀豊穣、家内・地域内の安全などを祈願する行事として一連のものであることがわかる。子どもが中心になること、藁を使うこと、龍蛇に見立てられること、祖霊とかかわることなどがすべて共通要素とはなっていないが、これらの行事の分布的重なりは、その基盤に共通した文化的観念があることを示唆しているだろう。このことは民俗事象を孤立して捉えるのではなく、他の事象との相互関連と広がりの中から総合的に捉えることの重要性をあらためて教えてくれる。民俗文化圏を考えることの重要性である。

3.2 綱の意味

綱引きと相撲という要素に注目して、綱の意味について考えてみよう。

北九州の盆綱は、民俗学的には「盆綱引き」と称するように、綱引きが主体である。この点が関東との大きな違いで、北九州では綱が仏の乗りものという意識はほとんどない。綱引きをしない例外は筑後市久富の「盆綱曳き」で、「盆綱引き」と呼称しないのも綱引きがな

いからであろう。久富は綱を曳きまわす子どもたちが全身に煤を塗って鬼角、腰蓑をつけ真っ黒な鬼に変装する。この異様な出で立ちを見ようと、見学者も多い。

関東で綱引きをともなう盆綱の分布についてみると、茨城では古い地名で稲敷郡桜川村古渡、稲敷郡牛久町岡見、東茨城郡内原村万蔵寺、西茨城郡友部町小原などでかつておこなわれていた（藤田 1964：69, 「但馬久谷の菖蒲綱引き」調査報告書編集委員会編 1991：100）。このうち稲敷古渡の綱引きは盛大なもので、長さ約 100m の藁綱を 15 日の送り盆のとき、東の上宿（農方）と西の下宿（浜方）に分かれて引き合った。上宿が勝つと「豊作」、下宿が勝つと「豊漁」になるといわれた。おわると綱を川に流した。仏様が綱に乗って帰ると言い伝えられているからである（藤田 1973：235）。古渡では昭和 30 年代に綱引きは途絶したが、2008 年に半世紀ぶりに復活している¹²⁾。

千葉では市原市大戸が 13 日の迎え盆の晩に、柏市大室が 15 日の送り盆の晩に綱引きをしたという（千葉県史料研究財団 1999：276）。

このように関東では綱引きの事例はそう多いわけではない。

北九州では、盆綱は地獄の亡者を綱で引き上げ救済するという目的でおこなうところが多い。これは目蓮尊者が地獄に落ちた母を綱で引き上げたという仏教の故事とも関連がある。たとえば福岡市大入、筑後市久富、前原市池田・泊などである（二丈町教育委員会 2006：30, 32）。このような伝承は盆が施餓鬼行事であるということをよく示している。

この点を関東と比べてみると、茨城、千葉では各家々の先祖供養という意味合いが強い

ようだ。綱が仏様の乗りもので墓と家の間の送迎に使われるという目的がそのことを示している。北九州のように地獄から引き上げるという伝承はこの地方にはない。

綱引きのあとに相撲をおこなうところがある。綱を土俵にして主として子どもが相撲をとる。北九州では福岡市西区草場、福岡市西区西浦（ここは「カズラひき」と呼んでいる）、糸島市二丈町大入、長崎県では壱岐市渡良の数例で多くはない。

九州で綱引きと同時に相撲もとるのは、南九州の十五夜綱引きに圧倒的に多くみられる。北九州の盆綱はこの綱引き、相撲という要素では南九州の十五夜綱引き圏に重なる。なお興味深いことに沖縄では綱引きが盛んだが、相撲はしない（国頭郡東村有銘ではおこなう。「但馬久谷の菖蒲綱引き」調査報告書編集委員会編 1991：112）。とすると九州、沖縄を 1 つの綱引き文化圏と捉えたとき、そのなかで相撲をともなうのは、分布圏の北と南よりは、中央部の鹿児島、宮崎、熊本の南九州に顕著な現象といえるだろう。

では関東ではどうか。関東における盆綱分布の最北端といえる栃木県大田原市佐良土（旧那須郡湯津上村佐良土）は 8 月 14 日に盆綱引きをするが（今は中止）、このとき使った綱を 8 月 27 日に行われる佐良土の鎮守である諏訪神社の奉納相撲に土俵として利用した。茨城では相撲の事例はない。千葉では成田市の山口、土屋、奈土などでは盆綱がおわると、頭と尻尾を切り取り胴の部分の土俵にして子どもが相撲をとった（弓削田 2005：73, 『広報なりた』2004 年 8 月 15 日号・2006 年 9 月 15 日号）香取市（旧佐原市）本矢作では 14 日の夜明け前に引きまわしをするが、かつては相撲もしたという¹³⁾。これ以外の地区の状

況についてはよくわからない。

綱引きも相撲も勝負を争うことで吉凶、幸運、豊穡などについて神意を占う行事である。小正月に各地でおこなわれている綱引きはまさに年占のためである。このような競技性のある行事がなぜ盆行事にともなうのか。もしそれを勝負を争う競技的なト占とだけ捉えるのなら、解釈はむずかしい。盆綱のなかの綱引きや相撲の要素を考えるには、死者供養という観点の導入が必要と思われる。

この点はすでに山口麻太郎が、壱岐における盆綱の考察のなかで触れている。山口は壱岐で綱引きがおこなわれるところの多くが墓や供養塔のある供養場であることに注目し、綱引きが供養・祈祷の方法としてあったと推測する。壱岐では綱引きが「亡者祭」とも言われるように、怨霊信仰との関係で無縁仏の霊をなぐさめるためにおこなわれ、また新しく仏となった人たちが安心してこの世の執念を去って成仏できるように祈願するためにあるという。

盆における綱引きがどこでおこなわれるか、その場所に注目した人は山口以外にいないように思う。しかしこれは盆綱引きの意味を考える上で、おろそかにできない問題である。千葉県柏市大室は15日の送り盆の晩に綱引きをした。2010年に13年ぶりに復活した綱引きは、いまは「大室ふるさとセンター」前の道路でおこなわれるが、このセンターはかつて墓地だったところである。いまも墓が40数基片隅に残っている(2011年8月15日の調査)。

大室の盆綱引きは千葉県に一般的にみられる仏の送迎に使う乗り物として集落を引きまわすことはせず、綱引きだけをおこなうのが特徴である。地元の人に聞くと、綱引きの目

的は農作物の豊凶を占うことで、綱を龍蛇に比定することもなければ、精霊を供養するという意識も希薄である。しかしそれはおそらく行事の意味の忘失であり、綱引きが墓地という供養場で実施されるということは、壱岐の「亡者祭」と同様の死者供養の意味があったと思われるのである。

山口の解釈では綱引きの競技性をどうみるか、すなわち対立し勝負を競う内容を盆行事のなかでどう説明するのか不明である。山口はそのような競技性は後発のもので、もとは引きあうのではなく、ただ綱を引いて回るだけの行事ではなかったかという。この前提が崩れれば説としての説得力はとぼしくなるが、綱引きが競技や神意うかがいの占いのためにあるのではなく、死者供養のためにあるというのは、先に述べたように北九州では地獄に落ちた亡者たちを、せめて1日だけでも綱で引き揚げて慰めようという伝承がよく聞かれるからである。

盆綱引きは死者の慰霊、供養のためにおこなうのである。長崎県唐津市鎮西町波戸で8月15日におこなわれる「海中盆綱引き」は、その由来が豊臣秀吉の朝鮮出兵と結びついていて、そのときの兵士の慰安と戦死者の供養のために引くという。盆の無縁仏、施餓鬼への供養という意義がここに読み取れる。

相撲や綱引きをその競技性から占いとだけ解釈しがちだが、死者供養という観点からいうならば、招福除災の意味も考えられる。死者供養が必要なのは、死者の荒ぶる霊は祀らなければ厄災を引き起こすからである。そこで除災のためにも亡者への供養・祈祷が求められる。綱引きはその供養と祈祷のためにおこなう。先祖迎いの盆行事に厄災、疫病、虫害など悪疫・悪霊・汚穢駆除の行事が融合す

ることがあるが、それはこの季節の気候や農事との関係からみても自然のなりゆきだろう。千葉県でも先に述べた匝瑳市片子妙印寺の盆綱のように、五穀豊穰、無病息災を願うところがある。境内の2本の大木にしめ縄のようにつるしておくのは、村落の境界に藁蛇などをつるす「道切り」、「辻切り」行事と同様に除災の意味をもつものである。

山口は壱岐の事例において、除災、死者供養・祈祷から盆の綱引きの意味を説明するが、相撲が盆綱にともなうことについてはなにも言及していない。壱岐にも旧渡良村に盆綱で土俵をつくり相撲をする事例があることを述べながらも、この競技を綱引き同様に供養・祈祷に結びつけて論じていないので、山口の綱引き＝死者供養説も中途半端な印象を受ける（山口 1970, 山口 1974）。

この相撲も除災の意味でおこなうと考えるのが妥当だろう。実際成田にはそのような意味で相撲をおこなうところがある。盆綱行事ではないが、大袋では8月24日の裏盆のときに相撲を取り、その目的は厄除けであるという事例があるからである（成田市史編纂委員会 1982:360）。死者供養の盆行事が根本的には除災の意義から発していることで、綱引きや相撲と結びつくのだと考えたい。

3.3 龍蛇・水神信仰

綱は龍蛇であった。仏の乗りものが龍蛇となることをもう一度考えてみよう。

九州では南方の十五夜綱引きは龍蛇との関係が深いが、北方の盆綱引きではあまりそういうことは聞かない。福岡市早良区田隅の盆綱引きは綱を龍蛇のように縋うというが（二丈町教育委員会 2006:22, 24）、それは綱の姿を形容した表現レベルのはなしで、地元の

人がそのように認識していたという報告ではない。

千葉でも奈土のように、綱を龍蛇ではなくウナギとみるところもある。盆綱をおこなう昌福寺には虚空蔵菩薩が祀られているので、その化身と考えられるウナギを綱に見立てているのである。これは例外とはいえ、ウナギと龍蛇の形態は同じである。

いうまでもなく龍蛇は水とかかわりがある。盆綱が伝承されている地域が利根川流域にあり、茨城では、涸沼、涸沼川周辺、霞ヶ浦周辺に密集し、千葉県の分布は印旛沼に近い成田市周辺に多くが存在していた（弓削田 2005:66）。利根川下流域という地理関係から、川・湖沼など水に関係ある行事であることは明らかである。

水の神である龍蛇が盆のなかでどのように扱われているかをみると、ひとつにはすでに見たように綱の最後の処理として川に流すという点である。川は象徴的には此岸と彼岸との境界なので、この接点において祖霊の送迎がおこなわれる。マコモ馬を仏を迎えるために川に流すのも同じ象徴的行為である。

佐倉市上勝田では、作りあげた綱は8月7日から13日までのあいだ、毎朝川に持って行き、水をかけるとい¹⁴⁾。茨城県稲敷市下須田では、13日、曹洞宗の般若寺から出発するが、家々をまわる前にまず川岸にある水神社に行く。子どもたちは、綱をもって水神社のまわりを走りまわる。こうすることで綱は祖霊だけではなく水神の力も宿すのだとい¹⁵⁾。

こうした例からわかるように、盆綱は仏様の乗りものであると同時に水神でもあった。綱が内在的に表象するものは、祖霊への供養でありながら、雨乞いや収穫への祈願、感謝など農耕儀礼とかかわる信仰といえる。さら

に最後に川に流すことは、祖霊を送り返すだけではなく、悪疫・悪霊を流し捨てるという意味あいもあり、仏送りと除災が同時におこなわれていると考えられる。

4. おわりに

本稿ではもっぱら千葉の盆綱をとりあげた。茨城の盆綱について詳細に述べる余裕もなく、利根川下流域の民俗文化圏の問題も、その重要性を指摘しておきながら総括的に論ずるにいたっていない。

盆綱は盆の行事としてはめずらしいものに属する。各家々の血縁的な先祖の供養、地域共同体としての地縁的な供養、無縁仏・施餓鬼の供養、水神・龍神、田の神への豊饒祈願、厄災疫病の退散、地藏信仰、境界行事などいくつかの要素が絡み、単純に解釈はできないところがある。

赤荻は都市近郊のかつては農村であった小さな集落である。そこで今もかろうじて生き延びている特異な民俗を盆綱研究の中で位置づけ、その作業を通して盆、祖霊観、龍蛇信仰、水神信仰、招福除災、農耕儀礼、蛇形の藁綱、綱引き、相撲、境界など日本の民俗行事の意味を考える上で、重要かつ普遍的な課題について考えてみた。

謝辞

赤荻の調査でお世話になりました成田市教育委員会生涯学習課文化振興室の大木さん、赤荻在住の大木昭二さんはじめ地区の方々と子どもたちに感謝もうしあげます。特に大木昭二さんには細かい質問にも丁寧にお答え頂き、地図の作成にもご協力頂きました。

またメールや電話で情報を提供して下さったつくば市の高橋昭彦さん、香取市役所総務部秘書広報課広報班の岡さん、香取市(旧佐原市)本矢作の畔蒜孝

さん、柏市教育委員会の吉田敬さん、大室盆綱引きの調査でお世話になった大室町会長の豊嶋一郎さんにも感謝もうしあげます。

注

- 1) 田の字型の農家は江戸時代末期から明治にかけて普及した。西日本の太平洋側に広く分布していて、その東限は千葉県なので、赤荻の家屋は田の字型様式の日本における最も東に位置する事例といえる。
- 2) 「住民基本台帳字別人口表」
<http://www.city.narita.chiba.jp/DAT/000081090.pdf>
- 3) 「住民基本台帳字別人口表」
<http://www.city.narita.chiba.jp/DAT/000056179.pdf>
- 4) 大室町会長・大室盆綱引き実行委員長の豊嶋一郎さんからの聞き取り(2011年8月15日)
- 5) http://yonouchi.cocolog-nifty.com/blog/2006/08/post_54de.html
- 6) <http://www.geocities.jp/sekohno/topic/bonzuna.html>
- 7) 土屋では2003年に復活したが、3日間ではなく14日の1日だけの行事となり、引きまわすのも新盆の家だけになったという。『広報なりた』2004年8月15日号。
- 8) 成田市土屋:『広報なりた』2004年8月15日号、青柳1964:16、佐倉市上勝田:千葉県史料研究財団1999:276、稲敷市下須田:
http://www.city.inashiki.lg.jp/data/minzoku_movie/shimosuda/shimosuda.html、稲敷市古渡:藤田1964:68など。
- 9) 八日市場市:千葉県史料研究財団1999:276、匝瑳市:『広報そうさ』2002年7月号 匝瑳探訪(28)など。
- 10) http://kashiwa.info/townnews/townnews_view.cgi?mode=detail&num=1221&page=1 また2011年8月15日、吉祥院での聞き取り。
- 11) <http://blue.ap.teacup.com/suigou/282.htm>
- 12) <http://sankei.jp.msn.com/region/kanto/ibaraki/081130/ibr0811300223001-n1.htm>
- 13) 本矢作在住の畔蒜孝さんからのご教示による。
- 14) http://www.city.sakura.lg.jp/bunka/bunkazai/invisible_cultural_asset.htm
- 15) 稲敷市立歴史民俗博物館製作ビデオ「稲敷の年中行事 2008年8月13、14日 下須田の盆綱」
http://www.city.inashiki.lg.jp/data/minzoku_movie/

shimosuda/shimosuda.html

なお以上の URL はすべて 2011 年 7 月 30 日閲覧。

写真

すべて筆者が 2010 年 8 月 15 日に撮影したもの。

引用・参考文献

- 青柳まち子. 1964. 「綱引についての一考察」『石田英一郎教授還暦記念論文集』角川書店.
- 上野誠. 2001. 『芸能伝承の民俗誌的研究』世界思想社, 第 4 章・第 2・3 節.
- 小野重朗. 1972. 『十五夜綱引の研究』慶友社.
- 嶋田尚. 1988-91. 「蛇型綱の習俗に就いて」1-4, 『茨城の民俗』27-30.
- 匝瑳市『広報そうさ』
- 高橋在久. 1978. 『生きている民俗探訪 千葉』第一法規出版社.
- 「但馬久谷の菖蒲綱引き」調査報告書編集委員会編.

1991. 『但馬久谷の菖蒲綱引き』浜坂町教育委員会.
- 千葉県史料研究財団. 1999. 『千葉の歴史』別編 1 (総論), 千葉県.
- 千葉県立房総のむら. 2000. 平成 11・12 年度企画展示図録『千葉県の七夕馬一草で作ったウマトウシⅢ・Ⅳ一』千葉県立房総のむら.
- 成田市『広報なりた』
- 成田市史編纂委員会. 1982. 『成田市史』民俗編, 成田市.
- 二丈町教育委員会. 2006. 『大入盆綱引き』(二丈町民俗文化財調査報告書第 4 集) 二丈町教育委員会.
- 藤田稔. 1964. 「茨城の盆綱」『茨城の民俗』3.
- 山口麻太郎. 1970. 「盆踊から盆綱引きへ」『民間伝承』34 (3), 六人社.
- 山口麻太郎. 1974. 「壱岐島盆綱引起源考」『山口麻太郎著作集 3 歴史民俗篇』佼成出版社. (初出は壱岐島科学の会『島の科学』8 号, 1970)
- 弓削田綾乃. 2005. 「成田市山口の盆綱一現代にいきづく民俗行事」『成田市史研究』29 号.